

## マラキ書

第一章一これマラキに托てイスラエルに臨めるエホバの言の重負なりニエホバ曰たまふ我汝らを愛したり然るに汝ら云ふ汝いかに我儕を愛せしやとエホバいふエサウはヤコブの兄に非ずやされど我はヤコブを愛しエサウを惡めり且つわれ彼の山を荒し其嗣業を山犬にあたへたり四エドムは我儕ほるぼされたれども再び荒たる所を建んといふによりて萬軍のエホバかく曰たまふ彼等は建んされど我これを倒さん人は彼等を惡境とよび又エホバの恒に怒りたまふ人民と稱へん五汝らこれを見て云んエホバはイスラエルの地に大なりと六子は其父を敬ひ僕はその主を敬ぶされば我もし父たらば我を敬ぶこと安にあるや我もし主たらば我をおそること安にあるやなんぢら我が名を藐視する祭司よと萬軍のエホバいひたまふ然るに汝曹はいふ我儕何に汝の名を藐視しやと七汝ら汚れたるパンをわが壇の上に獻げしかして言ふ我儕何に爾を汚せしやと汝曹エホバの臺は卑しきなりと云しがゆゑなりハ汝ら盲目なる者を犠牲に獻ぐるは惡に非ずや又跛足なるものと病者を獻ぐるは惡に非ずや今これを汝の方伯に獻げよされば彼なんぢを悦ぶや汝を受納るや萬軍のエホバこれをいふ九請ふ汝ら神に我らをあはれみ給はんことをもとめよこれらは凡て汝らの手になり彼なんぢらを納んや萬軍のエホバこれを言ふ一〇汝らが

わが壇の上にいたづらに火をたくこと無らんために汝らの中一人扉を閉づる者あらまほしわれ汝らを悦ばず又なんぢらの手より獻物を受じと萬軍のエホバいひ給ふ一日の出る處より没る處までの列國の中に我名は大なん又何處にても香と潔き獻物を我名に獻げんそはわが名列國の中に大なるべければなりと萬軍のエホバいひ給ふ二しかるになんぢら之を褻したりそは爾曹はエホバの臺は汚れたりまた其果すなはちその食物は卑しと云ばなり三なんぢらは又如何に煩勞しきことにあらずやといひ且これを藐視たり萬軍のエホバこれをいふ又なんぢらは奪ひし物跛足たる者病る者を携へ來れり汝らかく獻物を携へ來ればわれ之を汝らの手より受べけんやエホバこれをいひ給へり四群の中に牡あるに誓を立てて疵あるものをエホバに獻ぐる詐偽者は詛はるべしそは我は大なる王また我名は列國に畏れらるべきなればなり萬軍のエホバこれをいふ第二章一祭司等よ今この命令なんぢらにあたへらるニ萬軍のエホバいひたまふ汝等もし聴きたがはず又これを心にとめず我名に榮光を歸せずばわれ汝らの上に詛を來らせん又なんぢらの祝福を詛はんわれすでに此等を詛へり汝らこれを心にとめざりに因てなり三視よ我なんぢらのために種をいましめんまた糞すなはち汝らの犠牲の糞を汝らの面の上に撒さん汝らこれとともに携へさられん四わが此命令をなんぢらに下し與ふるは我契約をしてレビに保たしめんためなるを汝ら知るべし

萬軍のエホバこれをいふ五 わが彼と結びし契約は生命と平安とにあり我がこれを彼に與へしは彼に我を畏れしめんが爲なり彼われを懼れわが名の前にをのけり六 眞理の法彼の口に在て不義その口唇にあらず 彼平安と公義をとりて我とともにあゆみ又多の人を不義より立歸らせたり七 夫れ祭司の口唇に知識を持つべく又人彼の口より法を諮詢べしそは祭司は萬軍のエホバの使者なればなりハしかるに汝らは道を離れ衆多の人を法に躓礙かせレビの契約を壊りたり 萬軍のエホバこれをいふ九 汝らは我道を守らず法をおこなふに當りて人に偏りし故にわれも汝らを一の民の前に輕められまた賤められしむ一〇 我儕の父は皆同一なるにあらずやわれらを造りし神は同一なるにあらずや 我儕先祖等の契約を破りて各々おのれの兄弟にいつはりを行ふは何ぞニ ユダは誓約にそむけりイスラエル及びエルサレムの中には憎むべき事行はるすなはちユダはエホバの愛したまふ聖所を襲して他神の女をめとれりニエホバこれをおこなふ人をおし主なるものをも事ふる者をもヤコブの幕屋よりのぞきたまはん 萬軍のエホバに獻物をささぐるものにてもまた然り三 つぎに又なんぢらはこれをなせり 即ち涙と泣と歎とをもてエホバの壇をおほはしめたり 故に彼もはや獻物を顧みずまたこれを汝らの手より悦び納たまはざるなり四 汝らはなほ何故ぞやと言ふそは是はエホバ汝となんぢの若き時の妻の間にいりて證をなしたまへばなり 彼はなんぢの伴侶汝が契約を

なせし妻なるに汝誓約に背きてこれを棄つ五 エホバは只一を造りたまひしにあらずやされども彼にはなほ靈の餘ありき何故にひとつのみなりしや 是は神を敬虔の裔を得んが爲なりき 故になんぢら心に謹みその若き時の妻を誓約にそむきて棄るなかれ六 イスラエルの神エホバいひたまふわれは離縁を惡みまた虐遇をもて其衣を蔽ふ人を惡む 故に汝ら誓約にそむきて妻を待遇はざるやう心につつしむべし 萬軍のエホバこれをいふ七 なんぢらは言をもてエホバを煩勞はせりされど汝ら言ふ何にわづらはせしやと如何となればなんぢら凡て惡をなすものはエホバの目に善と見えかつ彼に悦ばると言ひ また審判の神は安にあるやといへばなり

第三章 視よ我わが使者を遣さんかれ我面の前に道を備へん また汝らが求むるところの主すなはち汝らの悦樂が契約の使者 忽然その殿に來らん 視よ彼來らんと萬軍のエホバ云たまふニされど其來る日には誰か堪えんやその顯著る時には誰か立えんや 彼は金をふきわくる者の火の如く 布晒の灰汁のごとくならん 三 かれは銀をふきわけてこれを潔むる者のごとく 坐せん 彼はレビの裔を潔め 金銀の如く かれらをきよめん 而して彼等は義をもて 獻物をエホバにささげん 四 その時ユダとエルサレムの獻物はむかし日の如く 又先の年のごとく エホバに悦ばれん 五 われ汝らにちかづきて 審判をなし 巫術者にむかひ 姦淫を行ふ者にむかひ 偽の誓をなせる者にむかひ 傭人の價金をかすめ 寡婦と

孤子をしへたげ異邦人を推擡げ我を畏れざるものどもにむかひ  
 て速に證をなさんと萬軍のエホバ云たまふ六 それわれエホバは  
 易らざる者なり故にヤコブの子等よ汝らは亡されず七 なんぢら  
 其先祖等の日よりこのかたわが律例をはなれてこれを守らざり  
 き我にかへれわれ亦なんぢらに歸らん萬軍のエホバこれを言  
 ふ然るに汝らはわれら何においてかへるべきやと言ひ八 ひと神  
 の物をぬすむことをせんやされど汝らはわが物を盗めり 汝ら  
 は又何において汝の物をぬすみしやといへり十分の一および  
 獻物に於てなり九 汝らは呪詛をもて詛はる またなんぢら一切  
 の國人はわが物をぬすめり一〇 わが殿に食物あらしめんために  
 汝ら什一をすべて我倉にたづさへきたれ而して是をもて我を  
 試みわが天の窓をひらきて容べきところなきまでに恩澤を汝ら  
 にそそぐや否やを見るべし萬軍のエホバこれを言ふ一一 我また  
 噬食ふ者をなんぢらの爲に抑へてなんぢらの地の産物をやぶら  
 ざらしめん 又なんぢらの葡萄の樹をして時のいたらざる前に  
 その實を圃におとさざらしめん萬軍のエホバこれをいふ一二 又  
 萬國の人なんぢらを幸福なる者ととなへんそは汝ら樂しき地  
 となるべければなり 萬軍のエホバこれをいふ一三 エホバ云たま  
 ふ 汝らは言詞をはげしくして我に逆らへりしかるも汝らは  
 我儕なんぢらにさからひて何をいひしやといへり一四 汝らは言  
 らく神に服事することは徒然なりわれらその命令をまもりかつ  
 萬軍のエホバの前に悲みて歩みたりとて何の益あらんや一五 今

われらは驕傲ものを幸福なりと稱ふ また惡をおこなふものも  
 盛になり神を試むるものすらも救はると一六 その時エホバをお  
 そる者互に相かたりエホバ耳をかたむけてこれを聽たまへ  
 りまたエホバを畏るる者およびその名を記憶る者のためにエ  
 ホバの前に記念の書をかきしるせり一七 萬軍のエホバいひたま  
 ふ 我わが設くる日にかれらをもて我賣となすべしまた人の己  
 につかふる子をあはれむがごとく我彼等をあはれまん一八 その  
 時汝らは更にまた義者と惡きものと神に服事るものと事へざ  
 る者との區別をしらん  
 第四章 萬軍のエホバいひたまふ 視よ爐のごとくに焼る日來ら  
 んすべて驕傲者と惡をおこなふ者は藁のごとくにならん 其き  
 たらんとする日彼等を焼つくして根も枝ものこらざらしめん二  
 されど我名をおそるる汝らには義の日いでて昇らん その翼に  
 は醫す能をそなへん 汝らは牢よりいでし犢の如く躍跳ん三 又  
 なんぢらは惡人を踐つけん 即ちわが設くる日にかれらは汝ら  
 の脚の掌の下にありて灰のごとくならん 萬軍のエホバこれを  
 言ふ四 なんぢらわが僕モーセの律法をおぼえよすなはち我が  
 ホレブにてイスラエル全體のために彼に命ぜし法度と誠命をお  
 ぼゆべし五 視よエホバの大なる畏るべき日の來るまへにわれ  
 預言者エリヤを汝らにつかはさん六 かれ父の心にその子女の心  
 を慈はせ子女の心にその父をおもはしめん 是は我が來りて詛  
 をもて地を撃ことなからんためなり